

書 評



野田尚史・迫田久美子編

学習者コーパスと日本語教育研究

くろしお出版、2019 年発行、204p.

ISBN : 978-4-87424-800-3

山田 翔太

1. はじめに

日本語学習者の言語データを集めたコーパスをどのように拡充させていくべきか、既存のコーパスをどのように活用して日本語教育研究を行うべきか、これらを示すことが本書の目的である。日本語学習者の日本語を分析し、日本語教育に役立つ研究を行うためには、多様なタイプのコーパスを作り、コーパスを使った研究のテーマや研究方法を多様化する必要がある、という見地から、従来のものとは異なるタイプのコーパスを構築することを提案し、既存のコーパスを使いながら新しいタイプの研究を行った例を示しているのが本書の特徴である。本稿では、本書の概要を述べ、さらに、日本語教育における意義と展望を述べる。

2. 本書の概要

2.1 本書の構成

本書は、2014 年 3 月 22 日～23 日に国立国語研究所で開催された『第 8 回日本語実用言語学国際会議』でのパネルセッション「コーパスと日本語教育」を中心に編纂されたものであるが、第 1 部～第 4 部と 4 つの部があり、計 9 名の日本語教育研究者の論文で構成されている。

第 1 部「学習者コーパスの構築と研究方法」では、以下の 3 つの論文が収められている。

- ・小林典子「日本語学習者はどのように聞いているか—ディクテーション・コーパスから見えてくるもの—」
- ・野田尚史「読んで理解する過程の解明—「読解コーパス」の開発—」
- ・渋谷勝己「未来の研究に向けたデータ収集—第二言語の習得・維持・摩滅の過程を解明するために—」

第 2 部「学習者コーパスによる語彙研究」では、以下の 2 つの論文が収められている。

- ・山内博之「タスク遂行の鍵となる形態素—KY コーパスへの話題タグと機能タグの

付与一」

- ・李在鎬「学習者の語彙使用は習熟度を反映しているか—学習者コーパスの定量的分析—」

第3部「学習者コーパスによる文法研究」では、以下の2つの論文が収められている。

- ・中俣尚己「気づきやすいコロケーション・気づきにくいコロケーション—母語話者と学習者の書き言葉コーパスの比較から—」
- ・砂川有里子「名詞述語文の習得に関わるねじれ文と「は」「が」の誤用について—学習者の縦断的な作文コーパスの分析から—」

第4部「学習者コーパスによるバリエーション研究」では、以下の2つの論文が収められている。

- ・迫田久美子「話すタスクと書くタスクに見る日本語のバリエーション—日本語学習者コーパス I-JAS の分析に基づいて—」
- ・橋本ゆかり「年齢と環境要因による習得プロセスの違い—コーパスから探る習得順序—」

2.2 第1部「学習者コーパスの構築と研究方法」

小林論文は、日本語学習者によるディクテーションを収集して整理した資料集を基に聴解過程を考察すること、および学習者によるディクテーション・コーパスの構築を提案することを目的としている。ディクテーションを収集し、資料化する方法を示した上で、具体的にディクテーションを分析し、考察しており、学習者の聴解過程を考究する上で貴重な論文である。

ただし、3.2「ディクテーションの収集方法」で、テレビの報道番組の中にある1つのセクションをビデオ教材として上級聴解クラスで利用し、宿題として全文の音声のディクテーションを課したこと、学習者はそれぞれのやり方で何度でも自由に聞き返しながらかき取っていることが示されている。「この資料集は、厳密な意味では、研究用資料として不十分なものとなっている。将来の研究目的のコーパス設計では改善する必要がある」(p.9)とあり、やや収集方法に問題があったと思われる。

野田論文では、学習者の読解の実態を解明するために「読解コーパス」を開発し、公開することの必要性を述べ、読解調査の方法と「読解コーパス」の開発の方法を示した上で、読解過程の調査から何がわかるかを具体的に示している。日本語学習者の読解についての研究は、作文についての研究と比べ、あまり盛んには行われていないことを繰り返し指摘し、読解研究の重要性を強調し、読解調査の方法と「読解コーパス」の開発の方法を明確に示している点は高く評価できる。さらに、読解調査において、学習者に自分が読みたいと思うものを読んでもらう、という点は独創性がある。

6. では語彙や漢字の知識、7. では文法、8. では既有知識とそれぞれの推測によって正確に読解できた事例と読解できなかった事例があげられており、しかも、学習者のレベルにおいては初級か中級か上級、母語においては漢字系か非漢字系、といった多様な対象者の調査結果が示されている。読解教育に大きく役立つ研究であると思う。

渋谷論文では、収集の目的が明確ではないデータを蓄積することの重要性を述べ、その

研究例としてパラオにおける日本語変種の実態調査を示している。パラオにおける日本語変種を記録、記述し、日本語変種の習得環境と習得過程を解明し、日本語変種の維持・摩滅の環境と摩滅の過程を解明することを目的としている。歴史言語学や方言学とつながる部分があり、本書の中で最も異色な論文であると考えられる。

課題としては、パラオの日本語変種の実態として明示された言語項目が可能形式の用例分布のみであった点があげられる。渋谷が高年層話者に行ったインタビューデータの中で使用された可能表現を分析した結果が示されているが、2.3「本プロジェクトではわからなかったこと」で、文末詞など他の言語項目においても、話者間でかなりの多様性が観察された。可能表現は比較的多くの用例が集まったが、使役や判断のモダリティについては十分なデータが集まらなかった、と言及されている。「(前略) 将来の研究を視野に入れてストックしておくデータ」を収集することの重要性」(p.61)を主張するのであれば、集まった用例が少数の言語項目も論文に明記すべきではないかと思う。

2.3 第2部「学習者コーパスによる語彙研究」

山内論文では、OPIの「超級」の話者を対象とした研究として、KYコーパスに話題タグと機能タグを付与して分析した結果、超級話者であることを最も顕著に特徴づける文法形態素は「こう」と「っていう」であることを示している。

調査において最初から上級話者と超級話者を厳格に区分している点に特徴がある。ただし、7.「まとめ」で、「こう」と「っていう」の使用状況は、「超級」でも話者によってかなりばらつきがあることを述べた上で、考察の対象から外した項目もタスク遂行能力を支えている可能性が指摘されており、「上級」と「超級」を同じカテゴリーで扱ってもよいのではないかと考えられる。「OPIにおける「こう」「っていう」の出現は、突き上げの回数よりも、話題の選択に大きく影響を受ける」(p.84)とあるが、2.「超級話者であることを特徴づける文法形態素」で示した文法項目の中で、本論文の考察の対象から外した項目の出現においても話題タグと機能タグによる相違が見られる可能性がある。

李論文では、学習者コーパスを定量的に分析することで、語彙使用の傾向と日本語の習熟度の関連を明らかにすることを目的としている。話し言葉コーパスであるKYコーパスと書き言葉コーパスであるYNU書き言葉コーパスのデータを調査した結果を示している。

李論文において最も独創的な発見は、語種に関する調査結果として、習熟度が上がると和語の使用率が高くなる傾向が部分的に見られたという点、とりわけ、KYコーパスにおいては、習熟度が上がるにつれ、和語の使用率が明らかに上昇したという点であろう。5.2「語種と習熟度について」の図5「語彙表の級別の語種分布図」からは、和語の比率は、級が上がるにつれて減る傾向がある、と読み取れる。しかし、KYコーパスにおいて、初級から上級に行くにつれ、和語の使用率は増加傾向にあり、YNU書き言葉コーパスにおいても、初級より上級の方が和語の使用率は高かった。日本語教育における語彙指導に新たな示唆を与える研究であると思う。

2.4 第3部「学習者コーパスによる文法研究」

中俣論文では、中俣(2014)を活用し、機能語のコロケーションという観点から書き言

葉コーパスを母語話者と学習者それぞれで比較した結果、特定の語同士のコロケーションは気づきやすく、学習者にとっても習得しやすいが、特定の語ではない構造とのコロケーションは気づきにくく、習得が難しいことを示している。

6.1「機能語と特定の語のコロケーション」で、初級日本語教科書には「着てみる」「はいてみる」といった着脱動詞+「てみる」のコロケーションが多く出現するが、BCCWJ 内での順位は低く、今回調査した学習者コーパスには1例も見られなかった。母語話者も学習者も使わない例を初級導入時に教える必要があるのかと省みることは今後の教材開発において必要になる、と言及されており、野田(2012)で繰り返し述べられている従来の日本語教育や初級日本語教科書の問題点がここでもそれとなく指摘されているように思える。

砂川論文では、学習者の縦断的な作文コーパスを分析し、名詞述語文の習得に関わるねじれ文と「は」「が」の誤用に着目して、習得の進展とこれらの誤用の産出との関わり、名詞述語文に関して必要な指導、作文指導において留意すべき点、これらについて考察している。他の論文の多くが、横断的なデータを調査している中で、砂川論文は縦断的なデータを調査しており、その点で希少な研究であると思う。

分析データは、中国語母語話者6名の作文データであった。縦断的なコーパスを用いて調査するのが今回の課題なので致し方ないかもしれないが、他言語の母語話者のデータも調査できれば、より良質な研究になったのではないかと思う。

7.「日本語教育への示唆」で、重点的な指導項目とならないためになかなか習得できない「NがNだ」のような名詞述語文があること、習得が進んでも解消しない誤用(原因や理由を主題にする誤用など)があることを示し、中俣論文と同じく、日本語教育における文型指導の問題点を指摘している。

2.5 第4部「学習者コーパスによるバリエーション研究」

迫田論文は、話すタスクと書くタスクにおける学習者の言語使用について検討し、タスクの相違が言語産出に影響を与えるか、言語産出が母語によって相違が見られるか、これらを明らかにすることを目的としている。他の多くの論文が1つの言語の母語話者、多くても2〜3の言語の母語話者を調査対象としている中、多言語(12言語)の母語話者を調査対象としている点、さらに、李論文と同じく、話し言葉データと書き言葉データの双方を調査対象としている点に特徴がある。

やや問題があると思う点としては、なぜ分析対象とする文法項目を「受身」「～てしまう」「有対自動詞」「助詞」のみに限定したか、その理由が明記されていない点があげられる。さらに、5.の「おわりに」で、「今回は母語の影響について十分に論じることができなかった」(p.167)とあり、母語による相違を説明することが今後の課題であると思う。

橋本論文では、可能形式という文法カテゴリーに絞り、第1言語として日本語を習得中の幼児(L1 幼児)と第2言語として日本語を習得中の大人(L2 大人)、さらに第2言語として日本語を習得中の幼児(L2 幼児)のデータを比較し、それぞれの文法形式の習得順序を分析している。他の論文がいずれも大人を調査対象者としている中、幼児も調査対象者としている点、さらに、砂川論文と同じく、縦断的なデータを調査している点に特徴がある。

ただ、なぜ可能形式という文法カテゴリーに絞ったか、その理由が明記されていないこ

とに問題があると思う。さらに、7.「習得プロセスに影響する要因と特徴のまとめ」にあるように、L2 大人については調査対象者を教室学習者に限定しており、位相が偏っている点は否めない。自然習得者も含め、幅広い位相の学習者を対象として調査することが今後の課題であると思う。

2.6 本書の特徴と傾向

各論文とも研究目的、研究課題、研究方法、分析結果、考察が記述されており、全体的な流れは読者にとって把握しやすいと思う。あとがきで、読者には、本書を読んでもらえれば、そこに構築されている科学としての言語の側面、自然言語処理技術や統計的データ解析の技術を駆使した言語科学としての言語学の世界に一層興味を持ってもらえるであろう、と言及されている。しかし、日頃からコーパスを使っていない読者やコーパスについての知識があまり豊富ではない読者にとっては、やや難易度が高い。末尾に索引がないため、自分の調べたいキーワードと関連する箇所のみを手早く読むのには難がある。李在鎬・石川慎一郎・砂川有里子著（2018）のようなコーパスの入門書を読み、知識を一通り身につけた上で、読者が自分なりに問題意識を持って本書を読めば多くのことを学べ、日本語教育の研究や実践に活かせると思う。

3. 本書の日本語教育における意義と展望

冒頭の「本書の目的と構成」に「日本語教育に実際に役立つ研究を行うためには、理論から出発するより学習者の言語データから出発するのがよいことが多い」（p.v）とあり、本書は、根本的に野田（2005）と野田（2012）の考えを受け継いだ上で、学習者コーパスをより深く分析し、考察した論文であると思う。従来の日本語教育研究（言語学的な研究と同様のテーマや方法による研究）のあり方を見直し、母語話者や学習者の言語データを基に日本語教育を研究していく上で、本書の論文はその道標となる研究であり、大きな意義がある。

会話コーパス、作文コーパスに加え、小林論文にあるディクテーション・コーパス、野田論文にある読解コーパスの開発が進めば、コーパスを使った研究はより発展していくのではないと思う。現行の教科書を見る限り、依然として日本語の構造や体系を教えようとしている部分が多く、言語学的な研究の論理に従った教育から脱却できていないのが現状であるが、今後、コーパス構築が進み、コーパスを活用した研究が発展し、それが日本語教育の実践に活かされれば、日本語教育はよりよい方向に向かうのではないと思う。

参考文献

- 中俣尚己（2014）『日本語教育のための文法コロケーションハンドブック』くろしお出版
 野田尚史（編）（2005）『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版
 野田尚史（編）（2012）『日本語教育のためのコミュニケーション研究』くろしお出版
 李在鎬・石川慎一郎・砂川有里子（2018）『新・日本語教育のためのコーパス調査入門』くろしお出版

（やまだ しょうた 早稲田大学大学院日本語教育研究科・修士課程修了）